

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720383

研究課題名(和文) 初期須恵器の生産・流通に関する実証的調査研究

研究課題名(英文) Research on the Early Sue-ware production and trade

研究代表者

三吉 秀充 (MIYOSHI, HIDEMITSU)

愛媛大学・埋蔵文化財調査室・講師

研究者番号：50284386

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では古墳時代中期の初期須恵器を対象として、松山平野に所在する地方窯である市場南組窯跡の発掘調査や初期須恵器出土遺跡・遺構の分析を通じて、生産と流通について研究を行った。その結果、市場南組窯跡は小規模ながらも比較的長期間操業する窯跡であることを明らかにした。また松山平野や岡山平野・総社平野では、陶邑とも異なる須恵器生産と流通が行われていたことを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：I researched the Early Sue-ware production and trade in the middle of Kofun period in Japan, through the excavation of Ichibaminamigumi Sue-ware kiln in the Matsuyama Plain, and the analysis of the sites and structures with the Early Sue-ware. As a result, I clarified that the Sue-ware production and the Sue-ware trade unlike Suemura, in the Matsuyama Plain, Okayama Plain and the Soja Plain.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学 須恵器

1. 研究開始当初の背景

日本列島における須恵器生産は、古墳時代中期、朝鮮半島からの技術的招来によって開始された。その生産の初現期は、長らく大阪府陶邑窯のみによる一元的な生産と想定されてきた(陶邑一元論)。しかし、1980年～1990年代、北部九州および瀬戸内海沿岸地域において初期須恵器の窯(地方窯)跡が約20基確認されたことにより、陶邑窯のみによる一元的な須恵器生産の開始ではなく、地方窯も同時に操業する多元的な須恵器生産の実態が認識されるようになった。地方窯の技術系譜も朝鮮半島の特定地域に限定されるものではなく、多様性があり、各地方窯で独自の交流の下、窯業技術を獲得していたことが明らかになっている。しかし、地方窯における須恵器生産は、陶邑窯と比較して小規模・短期間操業であることから、陶邑窯に対して従属的な位置づけとの評価がなされている。このような研究の現状に対して、研究代表者は大きく以下の2点に問題があると考えていた。

問題点1：地方窯における生産の実態が解明されていないこと

これまで検討されてきた地方窯の多くは、窯の残存状況が不明確なものや本格的な発掘調査が行われていないなど、窯跡資料として不十分なものであった。また、朝鮮半島との系譜についての多様性が認められるものの、その位置づけについては曖昧な点が残されている。

問題点2：須恵器の流通に関する実態が解明されていないこと

消費地出土の初期須恵器は、陶邑一元論が大きく影響し、陶邑産あるいは地方窯産という二項対立的な産地推定が行われ、地方窯同士の関係については等閑視されたままである。

問題点1に対して、研究代表者は、地方窯の1つである愛媛県伊予市市場南組窯跡の試掘調査を2007年4月より継続的に実施し、窯跡で焼成された不良品などを廃棄した灰原が極めて良好な状況で残っていることを確認している。本格調査を実施すれば良好な資料を得ることができると考えられた(三吉2010)。

問題点2に対して、陶邑一元論による須恵器生産の開始が疑問視されている現状に加えて、研究代表者は、西部瀬戸内地域における初期須恵器の流通に関する研究成果から、須恵器の流通は、政治的な関係のみによるものではなく、弥生時代以来の地域交通圏・交易圏が大きく関与していると予察していた(三吉2002・2008)。西部瀬戸内地域で見られる現象が、他地域に普遍化できるのか、広範囲の地域を対象としたより実証的な研究が求められていると、研究代表者には強く感じられた。

2. 研究の目的

(1)本研究では、良好な状態で知られる愛媛県伊予市市場南組窯跡の発掘調査を実施し、窯体構造、灰原出土須恵器などの分析によって、地方窯における生産の実態を明らかにすることを目指した。

(2)さらに、中央窯であるとされる陶邑産須恵器ならびに他の地方窯産須恵器の特徴の整理と消費地における出土須恵器の産地を推定する。そして、松山平野、岡山平野・総社平野をモデルとして初期須恵器出土遺跡・遺構の性格や出土状況の分析から初期須恵器の流通の背景を検討し、日本列島における初期須恵器の流通の実態解明を明らかにしようとしたものである。

3. 研究の方法

本研究では、初期須恵器の生産と流通の実態を解明するため、(1)地方窯における生産の実体解明、(2)須恵器流通の実体解明という2点から研究を進めた。

(1)地方窯の実体解明では、初期須恵器を生産していた伊予市市場南組窯跡の発掘調査を実施し、窯構造の記録化および灰原部分から須恵器を採集する。須恵器に関しては、考古学的な分析(形態・調整手法による分類)と自然科学的分析(胎土分析)を行い、地方における初期須恵器生産の実態を明らかにすることとした。

(2)須恵器流通の実態解明では、大阪府陶邑窯跡と岡山県奥ヶ谷窯跡出土の初期須恵器の特徴を抽出した後、松山平野と岡山平野・総社平野をモデルとして、消費地出土須恵器の産地推定を行い、陶邑系(陶邑あるいは陶邑の影響を強く受けた窯)産、奥ヶ谷窯産、市場南組産、その他に分類した後、出土遺跡・遺構の性格や出土状況に関する分析を行い、初期須恵器流通の背景を検討することとした。

4. 研究成果

研究方法(1)(2)それぞれから生じた成果は以下のようなものとなった。

(1)では、2012年2月から3月にかけて市場南組窯跡6次調査、2013年2月から3月に7次調査、計2回の発掘調査を実施した。調査では窯跡周辺の地形測量と谷部に形成された灰原の調査を行い、灰原の広がりを見ることができた。灰原から出土した遺物の多くは窯壁片であり、須恵器は少ない。灰原から焼土塊が出土し、一部焼土面も見られることから、周辺に未確認の窯体が存在する可能性もある。この点については今後の課題として残された。

出土遺物に関しては、洗浄・注記・接合作業を中心とした基礎整理作業を行った上で、市場南組窯跡3～5次調査ならびに1次調査時の採集資料との接合関係について検討を行い、これまでの資料との対応関係につい

て整理を行った。出土した須恵器の中には、従来知られていなかった把手付椀・筒形器台なども見られ、窯跡で生産されていた器種組成の実態を明らかにすることができた。

市場産須恵器の特徴的な器種である高杯形器台や壺Cの変遷、年代的位置づけについて検討した。高杯形器台を例にすると、6型式5段階の変遷を考え、消費地における陶邑系須恵器との共伴関係から陶邑編年TK216型式～TK23型式と併行する時期に位置づけられることを確認した。また市場窯跡で生産された高杯形器台のバリエーションは少なく、1～2種類の器台を生産していたことが明らかになった。これらのことから、市場窯跡は小規模な生産であるが、比較的長期間操業していたと位置づけることができた。

なお2012年5月、関連分野の研究者に出土須恵器に関する関連資料等の教示を得た。また市場窯跡で生産されたと考えられる消費地出土の須恵器に関して、胎土分析を実施した。しかし、分析資料が少ないことから須恵器の生産地を確定するまでには至らなかった。

(2)では、以下の成果があった。

松山平野の初期須恵器

初期須恵器が出土する古墳の墳形を見ると、小規模な前方後円墳である船ヶ谷向山古墳以外は、小規模な方墳あるいは円墳のみであることを確認した。特に周溝が方形に巡る小規模墳から出土する事例や一墳丘複数埋葬や墳丘をもたないものもある。その主体部は木棺直葬で、主体部内(棺内もしくは墓室内)から完形品の須恵器、小型あるいは中型の壺・ハソウと高杯・蓋杯が少量出土する。小規模墳ではあるが、被葬者は鉄剣・鉄刀を佩用できる立場にあったと言える。現状では同一古墳における市場産須恵器と陶邑系須恵器の共伴事例は見られず、特に主体部内に副葬される初期須恵器に市場産須恵器、陶質土器あるいは市場産須恵器である可能性が高いものが見られることから、渡来人や渡来人と密接な関係にある人物が、古墳主体部へ初期須恵器を副葬したと考えた。

一方、集落遺跡と祭祀遺跡では、市場産須恵器と陶邑系須恵器との共伴関係が見られることを確認した。古墳と集落遺跡・祭祀遺跡との間では、流通の状況が少し異なる可能性を想定できた。

また、松山平野における市場産須恵器との比較という視点から愛媛県内南予地域の宇和盆地出土の初期須恵器を検討し、大多数は陶邑系須恵器であるものの、市場南組窯跡で生産された須恵器壺が認められることを明らかにした。その上で、南予地域における市場産須恵器の流通範囲の南限を想定した。

岡山平野・総社平野の初期須恵器

総社平野に所在する奥ヶ谷窯跡から高杯、器台、壺・甕などの初期須恵器や軟質土器が出土しているが、消費地における明確な確認事例はない。奥ヶ谷窯跡出土須恵器に見られ

る特徴的な調整手法などから、総社平野内の集落遺跡で奥ヶ谷窯跡産と推定される須恵器が見られることを確認した。しかし、岡山平野に所在する湊茶臼山古墳出土の初期須恵器などは、奥ヶ谷窯跡で生産されていた須恵器に見られる特徴が見られず、他地域産あるいは奥ヶ谷窯跡とは別の窯跡の存在を想定する必要が生じた。これまでも在地研究者から、地域特有の初期須恵器の存在が指摘されており、複数の窯跡が存在した可能性を考える必要がある。

奥ヶ谷窯跡では高杯形器台の全形がわかる資料は見つかっていない。そこで平野内の消費地から推定在地産の高杯形器台を抽出し、その特徴を仮に在地産須恵器の特徴とした。それを受けて松山平野と比較すると、バリエーションが豊富であることを確認できた。複数の窯跡で生産されていた可能性もあるが、種類は豊富である。ただ高杯形器台の出土事例は少なく、型式学的変遷を追える器台も見られないことから、初期須恵器窯跡の操業期間は短かったか、あるいは高杯形器台が早い時期に生産されていない可能性も考えられる。地方で開窯した初期須恵器窯跡は小規模な生産で操業期間も短期間で終了するものもあれば、市場窯跡のように比較的長期間操業していた窯もあったことを明確にできた。

墓制との関係について見ると、総社平野では初期須恵器が古墳の主体部に副葬される事例は1例のみである。確実に在地産の初期須恵器と考えられるものは榊山古墳などの中規模墳や小規模古墳から出土しているが、主体部内へ副葬される事例は見られない。主体部に副葬できない理由があったことも想定できる。この点も松山平野における状況と異なる。

以上の検討から、松山平野と岡山平野・総社平野では、陶邑とも異なる多様な須恵器生産と流通が行われていた実態を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

三吉秀充、列島初期の須恵器と墓制、平成26年度瀬戸内海考古学研究会第4回公開大会予稿集、2014年5月、51-60、査読なし

三吉秀充、南予の初期須恵器、愛媛大学法文学部論集人文学科編第36号、2014年2月、77-97、査読なし

三吉秀充、市場南組窯跡で生産された初期須恵器を巡る諸問題、平成24年度瀬戸内海考古学研究会第2回公開大会予稿集、2012年5月、35-50、査読なし

[学会発表](計2件)

三吉秀充、列島初期の須恵器と墓制、平成 26 年度瀬戸内海考古学研究会第 4 回公開大会、2014 年 5 月 11 日、松山
三吉秀充、市場南組窯跡で生産された初期須恵器を巡る諸問題、平成 24 年度瀬戸内海考古学研究会第 2 回公開大会、2012 年 5 月 19 日、松山

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三吉 秀充 (MIYOSHI HIDEMITSU)
愛媛大学・埋蔵文化財調査室・講師
研究者番号：50284386

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：